

景観の目標

私たちは、身の回りの環境を単に絵画的な眺めとしてとらえるだけではなく、毎日の暮らしのなかで、全身で感じ取り、実感としてとらえています。景観まちづくりは、目に映る景観のあり方に光を当てながらも、五感を通してからだ全体でとらえられる環境の質を高め、暮らしを取り巻く身近な環境の総体としてのまちの風景を優れたものとして育んでいく営みです。

先人から受け継いだ自然の環境や生態系に配慮し、歴史や文化を伝える景観を活かし、美しく優れた景観を持つまちづくりを進めることにより、「暮らしの舞台」を快適で豊かにし、未来に引き継ぐ美しい風景都市・青梅をめざします。このように、青梅市の特徴ある自然、固有の歴史・文化や、身近な暮らしの舞台を活かしていく視点から、3つの「景観まちづくりの目標」を設定しました。

○山なみと清流が織りなす自然環境を守り育むまち

美しい山なみと清流は、誇り・親しみのあるふるさとの原風景であるとともに、多様な生き物の生息環境を生み出しており、市民は、自然を愛し、生き物とふれあい、四季の変化を目や耳や肌などからだ全体で実感しながら、心豊かで健康な暮らしを望んでいます。

この目標は、豊かな自然環境に包まれた暮らしを私たちがみんな守り、青梅でしか感じられない素晴らしい自然への感動を未来に伝え育んでいくまちの姿を示しています。

山なみと清流が織りなす豊かな自然環境のなかで育まれてきたふるさとの原風景を大切に、まちへの愛着を培うとともに、四季の

○固有の歴史・文化を受け継いでいくまち

表情豊かな自然に潤いや安らぎを感じられるまちをめざします。また、健全な自然環境を守り育て、その懐で共に生きていくまちをめざします。

市内には多くの文化財、寺社などの歴史的建築物や土木遺産が点在しているほか、古くから栄えた青梅宿や山あいの集落などの趣きあるたたずまい、各地でみられる石積みなどが、特徴ある景観をかたちづくってきました。また、祭りや市(いち)をはじめとする伝統的な行事などが、暮らしの晴れ舞台を彩ってきました。

この目標は、固有の歴史・文化に根ざした景観を、「先人たちの暮らし

の知恵」と「風土に培われたまちと暮らしの姿・形」を示すものとして、みんなで大切にしていこうとまちの姿を示しています。

いまを生きる私たちも毎日の暮らしのなかで、身近に固有の歴史・文化にふれあえるよう、歴史・文化を活かしみんなが楽しむまち、先人たちが培ってきた歴史・文化をつぶさに学び、暮らしを彩る知恵と作法を、未来の青梅を担う子どもたちにもしっかりと受け継いでいくまちをめざします。

○活き活きとした暮らしの舞台を整えていくまち

まちの急激な発展や情報・流通などの発達と生活圏・経済圏の拡大などにより、全国どこも代わり映えし

ない街なみが増えており、利便性や経済性のみを求め続けられ、今日まで残されてきた趣きのある街なみや味わい深い暮らしが残り残るとは限りません。

この目標は、「自然環境と歴史・文化を満喫する暮らしの舞台」にふさわしい「心豊かな暮らしの舞台」のあり方をみつめ直し、整えていくまちの姿を示しています。

みんなが自然環境と歴史・文化を満喫する暮らしの舞台を再発見し、自覚を持って調和ある街なみづくりを進めていくまち、日常生活の場を自らの手で快適な暮らしの場として整えていくまち、誰もがでることから取り組む活気あるまちをめざします。

構造別景観形成方針

○山地や丘陵地の景観を大切に

御岳山などの山地や市街地を囲む丘陵地は、景観と暮らしの環境の基調をなしています。まちを取り巻くこれらの山なみの美しい姿は、心の安らぎを感じさせ、樹林の自然とのふれあいは、健康な暮らしや四季の実感をもたらしてくれます。市民の多くが、このような山に抱かれたふるさとの情景に愛着や



景観まちづくりは、地域独自の歴史や文化を踏まえ、身近な環境の総体としてのまちの風景を優れたものとして育み、快適な暮らしの基盤として活かそうとするものです。市民の誰もが共有するさまざまな景観を豊かな暮らしの基盤として活かすための基本的な考え方を定めます。そのため、景観まちづくりの目標の実現に向けて、景観と暮らしの全体像を形づくっている7つの骨格的・構造的な要素を活かす観点から「構造別の景観形成方針」を設定しました。

誇りを感じています。

自然はかけがえのない資源ですが、樹林は適切に手入れしなければ人を寄せ付けない所となってしまう。

山や丘陵地の景観を大切に、四季を彩る豊かな樹林の形成やレクリエーションの場としての適切な活用、眺望の確保を図ります。市民や市外の人々も含めて、樹林を育てる人の輪を広げていきます。

○川の景観を主軸とする

多摩川は、崖線緑地の緑と一体となつて水と緑の軸を成しています。また、霞川や成木川・黒沢川などの荒川支流の河川沿いに集落が形成されています。そのため、市民の多くが川の近くで育ち、暮らし、水辺の眺めや川の音、川を渡る風、草の香りなどをからだ全体で感

じ、散策や生き物とのふれあいを楽しんできました。



多摩川と荒川支流の河川を地域の景観・環境の主軸として、暮らしのなかで川の関わり・川への関心を取り戻します。

良好な水質や豊かな生態系に配慮し、美しい川の姿を守り、散策や川遊びの場として活かし、水辺から伝わるやすらぎや楽しさを満喫しながら、きれいな川と水を大切にする心を伝えていきます。

地域別景観形成方針

●東部地域

山なみに抱かれたまちへの愛着を育む

まちなかから山なみ、丘陵地からまちを望む眺望景観を大切に、地域への理解と愛着を深めます。そのため、高層化・大規模化が進む建築物や構造物が、周囲の山なみへの眺めを阻害しないよう配慮します。丘陵地などでの開発行為に対しては、地形や自然、眺望などに配慮して、周辺地域と一体となった良好な景観を形成するよう指導します。

大岳山は、特徴ある姿がまちなかから印象的に眺められ、親しまれています。こうした山への遠景の保全を進めます。また、市街地において、街路樹・公園生産緑地や屋敷林など

市民の日常生活圏や地域コミュニティのまとまりに注目して、西部地域、東部地域、北部地域の3つの地域区分を設定します。各地域には、それぞれ固有の地域景観が生まれています。また、各地域の持っている役割も異なっています。これらを踏まえて「地域別の景観形成方針」を設定しました。

